
ラインハルト姫とバロリア王子

八石マムミラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラインハルト姫とバロリア王子

【Nコード】

N6064C

【作者名】

八石مامミラー

【あらすじ】

私は冒険がしたかった。しかし王女と言う理由だけで監禁をされ、ドレスを履かないといけないとかルールが多すぎて困っちゃう。私はバロリアと一緒に逃げ出した。それは自分の思いのままの生活をしたかったからであった……

プロローグ 旅立ち（前書き）

フォツシル・ルーはFF9に出てくる地名です。出来れば1000万に関係する名前にしたかったけどミリオンじゃネーミングセンス最悪だからFFの地名としました。

これは私がはじめに作った小説の試作品を描写増やして再登場させた傑作です。

世界観はオリジナル。

古代遺跡や蜂の巣、地獄の峡谷、魔王の住む場所（城や塔などは決めてない）は絶対入れる予定

プロローグ 旅立ち

私はラインハルト姫。リイルフェンガー帝国の王女様。
生活はかなり辛い物……

それは普段は部屋へ監禁されてしまい、ドレスを履くとかしなきや
いけない。

ちなみに自由は全く無い。かごの中の鳥である。

私は親戚のフォツシル・ルー王国のバロリア王子と逃げ出した。

私は帝国から逃げ出した。

ここは知らない場所。今の持ち物はリイルフェンガー帝国の魔法書
と4000マキル（この世界のお金）しかない。

食べ物もなく、私と王子の二人だけ。

その状況はかなり絶望だった。

出来る事は先に行くのみ

私とバロリア王子は3日間のまず食わずに進んだ。

しかし、町を見つけれなかった。

自由になるではない。帝国にいた方がまだマシだったかもしれない。

しかしもう……過去には戻れない。

それは仕方ない事……

ラインハルト姫「もう、死ぬしかないんだわ」

私は完全に諦めた……

その時、バロリアは見つけたの

それは希望の看板だった……

第1話 くさはらの草原。ダークライズとの出会い（前書き）

遅れてすみません。

第1話です。

第1話 くさはらの草原。ダークライズとの出会い

バロリア「ラインハルトさん。この看板見てみて」

ラインハルト「わかった。」

私はラインハルト、こっちにいるのはバロリア王子。
私達はこの看板を見た。

この看板にはそのような事が書かれている……
魔王が出現し世界を滅ぼそうとしています。
勇者とかいるとうれしいです。

この世界に現れた魔王を選伐してください。
dyダークライズ

ラインハルト「ダークライズねえ。魔王っぽい名前の癖してこんな
事を書くのかなあ。」

私が疑ったのは無理も無い。
余りにも名前が魔王っぽかったからだ。
その考えは置いといて

私達はくさはらの草原と呼ばれる
スライムやウィスパが生息している恐ろしい所。
私達2人でボーっと歩いていたらそこに入ってしまった。

ラインハルト「ちょっと怖いわね。バロリアー」

バロリア「僕が君を守る！」

そうしてモンスターに会わないように抜けようとしたがくさはらの草原の奥に向かってしまった……。

しかし、其処にスライムがピヨンプيونと襲ってきた。

アクーラ「スラヤアー！！！！！！」

バロリアくんは今回は戦いで不意打ち役となった。

私の出来る行動は殴る、蹴る、そして防御だ。

殴るは威力が低く、蹴るは命中率は略無い。そして防御は自分ひとりだからしても攻撃受けるだけだ。

殴り続けても勝てない。蹴っても外れて勝てない。

それはとりあはずバロリアとコンビで戦う事にした。

ラインハルト「はじめからそうしてよ」

アクーラ「このアクーラ様に勝てるかな」

バロリア「真・^{ラ・ワイス}聖刻のキャラの名前だろ。貴方は。」

私とバロリア王子はその敵に完膚無きにぼこぼこにされた。私達は戦闘もした事が無い……

ラインハルト「バロリア王子いー。私達は死ぬのかなあ。」

バロリア「助ける人は居なければそうだと思う……」

ダークライズ「フフフ。1人の人間発見だな。助けよう」

そこに現れたのはのちにダークライズとわかる人だった。
そいつは闇のオーラを持っていた。

サタン「ダークライズか。俺の手下のアクーラが倒した獲物はやらないぜ」

ダークライズ「この2人は勇者の心を持っている。世界のためにただく。」

アクーラ「フッフ。ダークライズを倒せば大魔王様がお喜びになる。殺します。『馬鹿』」

馬鹿と言う文字がダークライズを襲う
しかし効き目無し。

ダークライズ「このアクーラに石を投げよう」

石でつぶれてアクーラ一撃で倒した。

サタン「一番弟子のアクーラを倒せるとは。だが俺を倒せないぞ」
アクアショット『」

サタンの一番強い技 水系初中级技のアクアショット
そして

ダークライズ「塵以下だな『ダークボム』」

闇の爆弾がアクアショットを打ち消しサタンを殺す。

ダークライズ「ふつ。この2人を本当の勇者にしてみせる!!--!!」

第2話 魔法の特訓（前書き）

描写とかは控えめかもしれませんがよろしくお願いします。

第2話 魔法の特訓

ここはどこ。

私はラインハルト。見知らぬ場所に来てしまった……。窓からは草原が見える小さな小屋だった。

ダークライズ「お目覚めかい、ラインハルト姫、バロリア王子」

そして私は

ラインハルト「どうして私達の名前知っているの」

あの人はあんな答えを言いました。

ダークライズ「貴方達がお姫様と王子様。情報として手に入った。そして世界を救う予言でも貴方達が救うらしく俺は貴方達を鍛えて仲間として参加する事にしました」

ダークライズはそう言い。私達を勇者に鍛え上げるようだ。

バロリア「おはよう。ラインハルト」

今日からダークライズさんの特訓が始まる。

わくわくな私です。

ダークライズ「この世界では魔法が一番基本的な事。それを覚える
！……！」

ダークライズさんは魔法をやってみるといいました。
でも私は魔法と言うものを知りません。

ラインハルト「魔法ってナンですか。」

私はダークライズさんに魔法の事を聞いた。

ダーク「こんな事も知らないのか。教えてやろう、この世界の強力な戦いのすべ。勇者としてこの魔法を使えてこそ良い勇者なんだ。」

まずはファイアーの練習だった。

ラインハルト姫とバロリア王子も習得できなかった。

アクアの練習も少しやった。
それでも習得できなかった。

ダーク「取りあはずファイアーと少しサンダー&エアロの方針でいくぞおー」

私達はみっちり練習した。

数日(10日)はかかった……

そして少しは魔法が出来るようになった。

ラインハルト「世界の雲よ、強力な稲妻を呼びよこせ【サンダー】」

私の手のひらから少しの電撃が出た。

ダーク「ラインハルト。ファイアーは習得できなかったがサンダーの切れ味が良い。」

次はバロリアの魔法のばんだ。

バロリアは弱いファイアーぐらいは習得したらしい。

その上エアロを習得していた。

バロリア「聖なる風、やばい風。風の力で敵を打て【エアロ】」

バロリアは小さい風の渦を沢山呼び起こした。

ダーク「ラインハルトは電気属性向きでバロリアは風属性向きか。」

大魔王軍は古代遺跡に攻撃してきた。

魔法の練習どころではない。古代遺跡に向かうしかない！！！！

第3話 古代遺跡、フラッドウィスプの脅威（前書き）

古代遺跡編についていきました。

第3話 古代遺跡、ブラッドウィスピの脅威

ウィस्प「燃やせ、燃やせ」

この怪物はウィस्प。体が炎で出来た魔物だ。炎の威力が高く炎が効かないらしい……

ウィस्प「オーガン様。どういったご用件？」

そしてオーガンは

オーガン「この財宝を全て手に入れるんだ。」

ウィस्प「わかった。」

キラバット「1体だけだけどブラッドウィスピを大魔王が貸してくれました。これを分裂させましょうか。」

そしてオーガンは

オーガン「その必要性は無い」

* * *

私達はこの古代遺跡へ向かった。

古代遺跡にはいっぱい石や岩があった。

そこにキラバットとウィस्पが襲ってきたのだ。

ダーク・ラインハルト、バロリア。お前ら2人の力でこの敵を倒せ。

」

ダークライズなしでとりあはず戦う事に

バロリア「火炎の龍、炎の陣。強力な炎を呼出せ【ファイアー】」

バロリア王子が詠唱を放った。

炎が出現しキラバットを襲う。

キラバット「ぎゃああああつ」

ラインハルト「うりゃああああああああ」

私はキラバットに突進しダークライズから貰ったこの鉄の剣でキラバットを切り裂いた。

しかしウイスプが私に炎を出してきたんだ。

ウイスプ「ボオー」

バロリア「あぶないっ、聖なる風よ。闇の風よ守りきれ【エアロ】」

ウイスプの炎はバロリアのエアロに浄化された。

ラインハルト「よくもやったな。雨雲よ。強力な電気を呼べ【サンダー】」

私の手のひらから電撃が発生。その電撃がウイスプを貫いた。

ラインハルト「一見落着。」

ダーク「あぶないっ」

ダークライズは私とティンクを守って怪我をした。

ブラッド「ボオーボオーボオー」

そこにいたのは全身が血を帯びた赤きウイスプだった……
その実力はいかに 次のページに続く（嘘）

ブラッド「フ・フ・フ……【火炎放射】」

ブラッドウイスプの身体から火炎が私たちを襲った。

ダーク「闇の神様よ。強力な壁を作り出せ【ダークソードバリア】」

強力なバリアにプラスして闇の剣までダークライズは呼出した。

バロリア「ウイスプ相手ならばこれが効くよ【エアロ】」

極小の竜巻がブラッドウイスプを襲った。

しかしダメージを与えられないどころか分裂してしまった……。

ダーク「やばいな。ぽいつ」

ダークライズさんは闇の剣をブラッドウイスプに投げた。

そのブラッドウイスプ1体だけを倒した。

ラインハルト「もう一匹はどうしようかなあ」

そこにオーガンが現れた。

オーガン「ブラッドウィスプ。一時退却しろ」

そしてこのウィスプは

ブラッド「ボオー、逃げるっ」

ブラッドウィスプは逃げていった。

ダーク「まさか。こんなに強力なモンスターが出てくるとは大魔王は本当に本気を出しているのかもな。」

そしてこの先をどんどん私達は進むのであった。

第4話 古代遺跡 ガーゴイル兄弟

ダーク「まさかブラッドウィスパ級の強さのモンスターとはな。」
ダークライズはブラッドウィスパが出現したのがすごく危険だと言った。

そして私はダークライズにその事につっこんだ。

ラインハルト「このモンスターは危険なの？」

ダークライズさんはよく私やバロリアに教えてくれた。

ダーク「そうだ。ラインハルト、バロリア。このブラッドウィスパはオーガーよりも強い種族なんだよ。やばいことだよ」

そして私達はもっと進んでゆくと火ガーゴイルが2体待ち受けていた。

レフト「グハハハハ。3人の雑魚か。兄の俺がこの金髪とちびをやる。ライト。最後の一人をやれ」

もう一人の火ガーゴイルは

ライト「わかった。兄様。」

そうして私とバロリアはレフトと戦うんだ。

ダーク「ライトの方、俺について来い。」

ライト「わかった。」

ダークがライトをひきつけて遠くで戦っている。

今がチャンス。

フロント「暗黒の雲よ。強力な稲妻を呼び起こせ【サンダー】」

私の右の手のひらから電撃が放たれた…
その電撃が火ガーゴイルのライトを襲った。

レフト「ぎゃああああ。俺ら鳥は電撃に弱いんだよなあ。」

私はレフトにそういいかかった。

ラインハルト「ポ、ポケモン!？」

レフト「一気に行くぞ【火炎の息】」

暑い強力な火炎が私に襲った。

ラインハルト「ぐっ」

バロリア「僕がいるのを忘れるな。風の精霊、聖なる風。強力なエアを呼び起こせ【エアロ】」

バロリア王子はエアロを放った!!!!!!

風の竜巻が現れレフトの背中中の急所を貫いた。

レフト「ぎゃあああああああ。」

ガーレフトは消滅した。

ラインハルト「ダークライズさんとの合流もしておきたいな」

私達2人が中心部に向かった。

ダーク「フッフ。闇の力よ。敵を葬り去れ【ダークボム】」

ダークライズは闇の爆弾を生み出しガーライトを襲った。

ライト「ぐっ。」

ライトは消滅した。

ダーク「ライト、お前の死は無駄にしない。大魔王を倒していずれは復活させてやる!。」

ダークライズが一人になっている事がオーガンの所に伝わった。

オーガン「白蛇6体一気にあいつをやれ」

そして白蛇たちは

白蛇「了解」

そこにもうすぐ近づぐ。

私達よりもダークライズの方が早いのでダークライズが先に行く

ダーク「あっ」

そこには6匹の白蛇がいたのだ。

第5話 古代遺跡、最後の戦い（前書き）

古代遺跡編完結です。

物語はまだまだ序盤の中の序盤です。

第5話 古代遺跡、最後の戦い

白蛇「しゃああー【氷】」

沢山の氷がダークライズを襲う。

ダーク「ぐええええー。」

白蛇「しゃああー」

白蛇はダークライズを噛み付いた。

ダーク「ぎゃあああー【プリン召喚】」

ダークライズは魔方陣を書き。プリンと言うゴブリンを召喚した。

プリン「何か御用ですか。ダークライズ様。」

このゴブリンはプリン。ミスリルの弓に回復の杖を持ち、回復が出来るゴブリンである。

ダーク「回復してくれ」

そしてプリンはダークライズに回復の杖を向けた。

プリン「聖なる風と清らかな水よ。聖なる回復魔法になりよう【ケアルラ】」

聖なる回復魔法をダークライズは浴び。傷が癒えた。

「ダーク・プリン。お前は戻れ、そして俺がこの蛇をやる【ダーク・カッター】」

「プリンは召喚された召喚獣の家に戻ったようだ
闇のオーラの刃が沢山出現しそれらが白蛇達を襲った。」

「白蛇たちは死んだ。」

「ダーク・ククク。もうすぐこの古代遺跡のボスの所だな。」

「オーガン「仕方ない。毒キラビーとキラビー30体を近くに配置だ。」」

「オーガンはそうしてキラビーたちを配置していた。」

「そして私とバロリア、ダークライズの3人は同時にこのオーガンの所に到着した。」

「ラインハルト「ヤバイわ」」

「私はキラビーの大群がやばそうだった。」

「ダーク「バロリア。エアビームだ。」」

「そしてバロリア王子はダークライズが言ったとおりに呪文を言っている。」

「バロリア「この技は時間がかかりそう。この隙に仕切っているキラ」

「ビーを倒そう」

私はキラビーの仕切っている毒キラビーへ攻撃しようとした。

ダーク「ラインハルト、ただで近づけると思っているのか。敵は悪だからな。汚い手を使ってくるかもしれん」

ダークライズの言うとおりだ。

私はつい毒キラビーを襲おうとした。

それはやっぱりワナだった。

ブラッド「……………【火炎放射】」

ブラッドウィスピの強力な火炎放射を諸に当たってしまった。

ラインハルト「ぐっ。やばいっ」

しかしテンションが上がり力が湧いてくる。

私はすぐくやられそうなのに。

そして強力な技をひらめいた。

ラインハルト「行くぞ。この私の新魔法【エレキ】」

私の両手から強力な電磁波が発生。

その電磁波がブラッドウィスピを包み消滅させた。

ラインハルト「やった。」

私はやったと言ったら疲労とダメージにより倒れた。

当然だ。ブラッドウィスピは物凄く強いから……

バロリア「風の王者よ、光線を与えらん……。魔人と風、聖なる風。強力な威力を与えろっ【エアビーム】」

王子の身体から強烈な風が生み出され口から風の光線が放たれた。キラビー30体諸共やつつけ、毒キラビーにも大打撃を与えた。

オーガン「おのれえー。もう俺と毒キラビー1体だけじゃん」

敵のオーガーが馬路ギレしてしまってます。

私達はバロリアとダークライズさんぐらいしか戦えません。

バロリア「ライハルうー。残りやこの人と僕で倒すから安心して【エアロ】」

風がキラビーを包み込んだ。

毒キラビー「ぎゃあああ」

ダーク「オーガー程度は雑魚も当然【ダーク・ショット】」

ダークライズの腕から闇の玉が出現。

それがすごい勢いでオーガンを襲った。

オーガン「鉄の斧よ守れ」

オーガンの鉄の斧は壊れたが攻撃を殆ど防いだ。

バロリア「炎の龍よ。力を与えよ…【ファイアー】」

毒キラービーの背後からバロリアは炎を呼出し毒キラービーを消滅させた。

オーガン「一気に行くぞー」

オーガンはダークライズを斬りついた。

ダーク「ぎゃあああああああああ」

ダークライズの左肩にどろどろと血が吹いている。

大怪我で全治は大変なほどに。

バロリア「風とともに。聖なる力を呼出せ【エアビーム】」

さっきよりも威力が大幅に低いエアビームがオーガンを襲った。

オーガン「このちびとタイマン勝負ならば勝てるぜ。ウハハハハ」

そのオーガンは隙が出来てしまった。

背後にダークライズがいた。

ダーク「終わりだ……【ダークボム】」

ダークライズは沢山の闇の爆弾を呼び出しオーガンを消滅させた。

ダーク「これぐらいの怪我。プリンに直してもらえばよい。問題は魔法書だ。これを町で買わなきゃ強くなれない。武器も少ない。そ

れじゃやばい。町に行く最短距離で行くか。」

私達はプリンに回復してもらい最短距離であるシュテンマウンテンへ向かった。

第5話 古代遺跡、最後の戦い（後書き）

かなり長くなりました。

でも良く出来たと思います

第6話 シュテンマウンテン。3人の盗賊

私達は強力な剣が欲しい。

沢山の魔法が欲しい。

私とバロリアとダークライズの3人でこのシュテンマウンテンへ向かった。

ラインハルト「現在お金はっ」と

お金は200エルド。結構たまっていた。

ラインハルト「あのブラッドウィスプを2体も倒したほどだからな。」

私は古代遺跡の戦いを思い出していた。

そしてダークライズが言った。

ダーク「ここは結構危険な場所だし。町に一番近いからただけでこの地方では3番目に危険な場所だからな。」

その言葉を聞いて私は愕然とした。

危険な場所は強い敵もいっぱいいる。

私や王子様は新米冒険者だし。ダークライズさんが本当に強いかどうかもわからない。

果たして大丈夫なのだろうか。

その時3人の盗賊がいた……

一人目はやや攻撃型の炎光司。

炎光司「このシュテンマウンテンに来た冒険者を倒してお宝貰っちゃうぜ。」

二人目はアース。攻撃攻めで恐ろしいらしい。

アース「クッククックッ、俺のフェニックスソードの力を見せてやる」

3人目はアクア・ミルシア、この盗賊のリーダーであり攻撃力はアースに負けるが他の全ての点では強い。

ミルシア「……………関係無いわ。敵は葬りさるのみ」

* * *

へブ「まよっちゃたな。ダークライズさんの勇者募集の勇者の仲間になりたいのに。」

へブがダークライズを探して迷っている事を知らずにいた私達。

私達はシュテンマウンテンの入り口についた

ラインハルト「この場所がシュテンマウンテン」

私は驚いた。

そして入ろうとすると3匹の火ガールゴイルが襲ってきた。

ラインハルト「電撃の力よ。数々の力を与えらん……………【エレキ】」

私は電磁波を呼び起こし火ガールゴイルに大打撃を与えた。

バロリア「聖なる風よ、悪の風よ。神の裁きを下せ【エアビーム】」

バロリアの口から強烈な風の光線が出た。

それが火ガーゴイルを消滅させた。

ダーク「ダークボム、ダークカッター、ダークショットよりも強力な技を受けてみる【ダークメテオ】」

空から闇の高温の隕石がいくつか降ってきた。

それが火ガーゴイル達を襲った。

一瞬で消滅させた。

66の経験値と21エルドを手に入れた。

バロリア「現在資金は221エルド。低いなあ。」

ラインハルト「そうでもない。私達はまだまだおかねを稼ぐ。大金持ちになりたいし」

そしてこの山の中に入っていく事に

第7話 シュテンマウンテン 新たな仲間・ヘブ

私達は3時間も歩いている。

道に迷ったらしい。

どうしてだろうか……。

バロリア「いや〜だ、いや〜だ。迷った迷った。」

バロリアは意外と泣き虫だった。

そしてダークライズは

ダーク「一人人間が倒れているぞ」

私達はその太った少年の所に行った。

そして助けた。

ヘブ「俺はヘヴン・アランカル。宜しく。」

この人はヘヴン・アランカルと言う人らしい。

ヘブって私たちは呼ぶ事にした。

ラインハルト「私はブrontじゃない。ラインハルトよ。ヘブさん。

宜しくね」

バロリア「僕はティンクではなかった。バロリアと言います。どうして迷ったか教えて欲しい。」

ヘブ「ダークライズって言う魔王っぽい名前の方が勇者募集しているのでその勇者か勇者をサポートする仲間になりたいんだよ。」

そこにダークライズは話した。

ダーク「俺がダークライズだ。良いだろう。お前を仲間に入れる」

そしてヘブは

ヘブ「有難うございます。」

ヘブは鼻糞を穿っていた。

ラインハルト「ヘブが隣は辛いから離れて」

ヘブは離れた。

そして皆で進んでいるとき3人の盗賊が襲ってきたのだ。

ミルシア「炎光司、行きなさい。」

私たちの前の盗賊の女の人が誰かに命令をした。

炎光司「俺の3つの特殊技を受けてみる【炎の香】」

炎光司は良い香りで私たちを誘い、そのまま炎で囲む。

ヘブ「この技ぐらい、俺の特殊技の力でいくからな【ヘヴン・バリ
ア】」

ヘブは天国の力でバリアを作り炎を消し止めた。

バロリア「風の王者よ、光線を与えらん……。魔人と風、聖なる風。

強力な威力を与えろっ【エアビーム】」

バロリアは魔法の言葉を長く言い威力の高いエアビームを発射した。

アース「クツクク【ハイパーナックル】」

敵のパラディンは手に力を込め思いっきりエアビームに殴った。
しかしエアビームの方が強かった。

アース「ぐっ。これは必殺技ですらない。この程度の奴ぐらいからは殺せるぜ」

そこにダークライズが背後から現れた。

ダークライズ「それはどうかな？、闇の力よ。地獄の隕石で焼き尽くせ【ダークメテオ】」

闇の隕石がすごいスピードでアースに襲った。

アース「この程度は平気だな……。【超必殺技・ミカズキフェニックスソード】」

アースは全身から力を込め。強力な不死鳥の力でダークメテオを砕きダークライズを襲った。

ダーク「ぐっ。これほどまでに。俺の新しい力を解放するしかないな。【闇の魔王・ダークライズ】」

ダークライズの身体に強力な闇の力が集まった。
そしてダークライズは闇の精霊に変形した。

ダーク「この力を使わせるほどの相手とは。本気で生かしてもらおう
【ダークカッター】」

ダークライズは強力な闇の刃を作り出しアースを襲った。

アース「さ、さすがにすごく強い力だ。しかしこれぐらいの技には
必殺で十分【エンゲツクナイナツクル】」

この2つの攻撃は相打ちした。

ダーク「これぐらいは本当の攻撃ではない【ダークフレア】」

ダークライズは瞬時に相手の後ろに回った。

そして強力な紅蓮の火炎が闇に染まったダークフレアを起こした。

そしてアースは力尽きた。

バロリア「すごい戦いだあ【ファイアー】」

バロリアは炎を炎光司に向かって攻撃した。

炎光司「第2の技【我道の夢】」

* * *

炎光司が連続でパンチをバロリアにやっている。

それをへブが守った。

へブ「天国の力よ、守れ【へヴン・バリア】」

ラインハルト「デンリュウの力よ。電撃の本当の威力を思い知れ【エレキ】」

私は炎光司が連続攻撃している隙を見て攻撃した。

炎光司「かなり痺れたぜえ。この必殺技で【炎撃殺法】」

炎光司が最後の攻撃をへブにした。

へブ「本当の天国よ。味わえ【へヴン・ザ・ビーム】」

天国の力がこもった光線が炎光司を貫いた。

炎光司は血液が足りずに死んでしまった。

ミルシア「この状況だと私は逃げるのが正解。逃げます。」

敵のリーダーのミルシアは逃げてしまった。

でも私たちはこの山の出口にたどり着いた。

バロリア「この先に滝があるんだ。」

そしてへブは

へブ「この滝は危険らしい。挑んだ冒険者の殆どが重症を負ったほど。大魔王軍の基地かも知れない。」

そして私は入り口で小さな宝箱を見つけた。

ラインハルト「開けよう」

宝箱には500エルドが入っていた。
現在エルド722

フェンシルの滝へと、私達は進んだ…

第8話 フェンシルの滝【前編】

ここはフェンシルの滝

モンスターが多く住んでいると昔本で読んだ事がある。

ここは空想の話だと思ったのだが本当にあつて私はびっくりした。

ラインハルト「うああああ。こんな場所行きたかつたわ。」

そしてバロリアは

バロリア「ラインハルト姫。4人で行けば怖くないよ」

そして私たちが進んでゆくと回復スライムと白蜂が襲ってきた。

ホワイトビー「ブーン、【ミサイル針】」

沢山の針がミサイルになり私たちを襲った。

ライン「よくもやってくれたわね。【サンダー】」

電撃が白蜂をしびれさせた。

バロリア「痛いじゃないか。【エアロ】」

バロリア王子はエアロを唱え白蜂は致命傷になった。

回復スライム「ポヨヨーン【ヒール】」

回復の風が白蜂を包み込み傷を大幅に癒した。

「ダーク」一気に回復を消すぞ【ダークメテオ】」

強力な隕石が白蜂を消滅させた。

「へブ」天国よ。力を持って【へヴン・ビーム】」

光線が白蜂を消滅させた。

合計35の経験値を得た。14エルドを手に入れた。

現在のエルド 735エルド。

* * *

ロナウペラ「リーフォーガーのゴン。このフェンシルの滝を支配しておけ」

こいつはガーゴイルエンペラーのロナウペラ。物凄く強いらしく大魔王軍とは別の悪者である。

手下のゴンを配備したらしい。

ゴン「わかりました。ロナウペラ様。」

その敵の2人の行動を知らない私たち。

このフェンシルの滝を進んでいる。

3体のキラールオーガーと1体とブラッドウィスプが襲ってきた。

「バロリア」やばいかも【エアビーム】」

バロリアは口から光線を吹きキラーオーガーに攻撃。
しかし威力が足りなかった。

へブ「へヴンの力よ。天国への道を開け【へヴン・ザ・ショット】」

へブは強烈な聖なる力をキラーオーガーにやった。

2体のキラーオーガーをしとめた。

ライン「電撃よ。強烈な電磁波を作れ【エレキ】」

電磁波がブラッドウィスピを襲う。

しかし敵のブラッドウィスピは分裂してしまった。

ライン「し、しまったわ。」

ブラッドA「……………【ダークメテオ】」

ブラッドウィスピは暗黒の隕石をへブに向けて撃った。

へブ「やばいな、天国の力たちよ。へヴンの名の元へ力を貸してくれ【へヴンバリア】」

へブはこれ以外のへヴン系バリアを習得していなかった……………。
そのバリアは威力が低くダークメテオが小型化してバリアは解けてこの隕石でへブは怪我してしまった……………。

第9話 フェンシルの滝 後編

ダーク「闇よ、切り裂け【ダークカッター】」

闇の刃がキラオーガーを切り裂き消滅させた。

へブ「炎の魔物よ。地獄の火炎を呼び座せ【ファイアー】」

へブもファイアーを習得していた。

私だけ習得していないということ？。

その炎がブラッドウィスプを襲った。

しかし効き目無かった。

バロリア「炎に風をやると酸素が増え強くなるかも。しかし酸素少ない風ならば【エアロ】」

バロリアは風に酸素少なく制御してブラッドウィスプを襲った。

ブラッドウィスプはもがいている。

ライン「うりゃああああああああ」

あたしは鉄の剣でブラッドウィスプを切り裂いた。

そして後敵はブラッドウィスプ1体のみだ。

ブラッド「ボオーボオー【火炎放射】」

ブラッドウィスプの身体から私に火炎放射が発射された。

ライン「くっ」

私は剣を地面に突き刺してしゃがんだ。

ダーク「へブ、とどめの一撃だ」

ダークライズはへブに命令した。

そして……

へブ「わかったぜ！【へヴン・ザ・ファイアー】」

へブは天国の力を込めて強力な炎でブラッドウィスピに攻撃した。

ブラッドウィスピに大打撃を与えた。

ライン「とどめだあ。【エレキ】」

私のエレキがブラッドウィスピのとどめをさした。

合計295の経験値を得た 79エルドを手に入れた。

私はレベルアップした。

バロリアはレベルアップした。

といえはいいのかな。

それだけみんなは強くなつて滝の中心地に着こうとする。
強敵が待っている事も知らずに

* * *

ゴン「まっていたぞ。俺らを倒せるかな」

ブラッド「ボオーボオーボオー」

敵はリーフォーガー1体とブラッドウィスプ3体だ。

このブラッドウィスプ達も普通よりも威力が高そう。

ダーク「闇の炎よ。聖なる力を含み攻撃せよ……【ダークフレア】」

強力なフレアがブラッドウィスプを襲った。

ブラッドA「愚かなり【ファイアーウォール】」

ブラッドウィスプは強力な壁を作り出しダークフレアを無効化した。

ブラッドB「殺しだ【ファイアーブレーカー】」

ブラッドウィスプの2体目の身体から空を飛ぶ炎の剣が出現した。

ブラッドC「火炎よ。強力な隕石になり攻撃せよ【ダークメテオ】」

強力な隕石が生み出されへブを襲う

へブ「神様よ天国のフィナーレを作り出せ【ヘヴン・オブ・ザ・メテオ】」

へブは全ての力を込め隕石を壊しブラッドウィスプBとCを倒した。

血ウィスプA「ゴンさん、爆弾を使え」

そしてリーフオーガーは

ゴン「爆弾ポイツ」

あのブラッドウィスプは爆弾で自滅ではなく3体に分裂した。

ライン「分裂！？ やばすぎ【エレキ】」

私は電磁波を出した。

バロリア「酷い敵ですね【エアビーム】」

バロリアの口から風の光線が出た。

この2つの魔法の攻撃が組み合わせり敵のブラッドウィスプを1体倒した。

ブラッド「フッフ、【ファイアーブレイカー】」

ブラッドウィスプ達は炎の剣を呼び出した。

ゴン「敵は死ぬのみだよ【リーフショット】」

へブ「戦国の天国よ。俺の名の元へ【ヘヴン・オブ・ザ・カッター】」

強烈な刃はリーフショットを撃ち殺した。

ゴン「ぐっ」

ライン「うりゃああああああ」

私は敵のオーガーに剣で攻撃した。
しかし弾き飛ばされた。

バロリア「風の王者よ、光線を与えらん……。魔人と風、聖なる風。
強力な威力を与えろっ【エアビーム】」

ティンクは口から強烈な風の光線を出した。
しかし……………

ゴン「この程度のこうげきなど塵だな【全力攻撃】」

敵のリーフォーガーはティンク王子に攻撃した。

そしてエアビームの威力を弾き飛ばしてティンクにきりつけた。

バロリア「ぎゃああああああああああああああああああああ
ああああああああ」

* * *

バロリア「なぜ勝てないの。どうして勝てないの。どうしてもこの
敵と勝負にならないの」

王子は悲しんだ。

凄く悲しんだ。

ダーク「オラオラオラオラ」

ダークライズはブラッドウィispを2体倒した。

へブ「全ての力よ。増幅し敵を打て【へヴン・ザ・フレア】」

へブは残りわずかな力でへヴンのフレアを起こした。

私はこの技に増幅させようと思った。

ライン「デンリユウと世界の雨雲よ。最強の電気を運びさせる【エレキ】」

私は精一杯のエレキを作りへヴンのフレアと合体して敵のブラッドウィispを倒した。

ゴン「一気に一掃してやる【エアクロス】」

あのリーフォーガーは竜巻を起こし私やへブ。ダークライズに強力な攻撃をしてきた。

ダーク「お…俺ももうだめかな。」

ダークライズはかろうじて助かっているが私やへブはもうだめである。

そしてバロリアはメキメキと全身の力が集まってゆく。

バロリア「風の王者よ。あのリーフォーガーを滅ぼせ【エアロラ】」

王子は強力な風の玉を呼び出しゴンに攻撃した。

第9話 フェンシルの滝 後編（後書き）

次からは番外に近いかも

第10話 魔法の修行 再び（前書き）

ラインハルトは男になりきる決意をする……

魔法の修行、そして真・ラインハルトになる物語

新章突入！！！！

第10話 魔法の修行 再び

ここはカライングの町。

トイラー大都市よりは小さい場所だが凄く大きい場所。
世界でも優勢な場所である。

ライン「装備を買いましょう！」

私達は武器防具屋についた。

テンシュ「何買う」

売り物

鋼鉄の剣 120エルド（在庫1本）

鉄の剣 100エルド

鉄のこん棒 80エルド

鎖帷子 100エルド

でした。

私は鎖帷子と鋼鉄の剣。バロリア王子に鉄の剣お下がりさせへブが
鉄のこん棒

資金が421エルドに減ってしまった。

ダーク「次は魔法書だ。」

魔法書【中級】 400エルド

魔法書【回復】 1280エルド

ルートの本 2850エルド

天龍の書 25000エルド
魔法書【上級】3500エルド

だったので魔法書を買う事にした。

ダーク「お前ら、6日で鍛える。魔法は3日に1回だぞ。」

そして私は

ライン「わかったわ。私もがんばる！」

王子やへブだってがんばる気満々。

1日目は私が魔法練習と言う事になった。

* * *

ダーク「魔法の知識を深めてやる」

私は魔法と素手だけでモンスター達を戦ってゆく事になった。
魔法書の力で経験値つむ毎に魔法がうまくなる

スラ「キピー」

スライムが3体召喚された。

ライン「炎よ。打て【ファイアー】」

炎がスライムを襲った。

1匹消滅させた。

スラ「キビー」

スライム2体の攻撃を受けた。

皮の服だけで受ける攻撃は痛い。

ライン「お水の花道よアクアのナを持って【アクア】」

私の手から水を発射した。

スライム達は滑り全滅した。

ライン「これが読める」

私は電気魔法のベルス・ダーラを覚えた。

次はウイスプ2体とコボルトが現れた。

ライン「この新技は詠唱なしで使えるわ【ベルス・ダーラ】」

しびれないが私の身体全体に電撃が帯びた。

これを敵に向けて放つ。

鬼火「……………シュー」

ウイスプ2体諸共消滅。

オーガー「ダークライズ様のためにも貴方をコテンパンです。」

オーガーは私に向かって強烈な攻撃を放ってきた。

その攻撃は威力が高く血も吹き出る程です。

ライン「ぎゃあああああああああああああああ」

私は大怪我をした。

これぐらいの事では負けない。

ライン「うりゃあああああああああああああああああああああ
あああああああ」

私は負けない。どんな事があっても負けない。

オーガー「負けました。貴方は男になりきる姫になればもっと強くなれると思います。」

私は練習からの一休みを3日いただいた。

これを使って色々町で男としての情報を貰う事にした。

アイス、ファイアーボール、エアロぐらいの技は私は習得した。

第11話 俺の決意の後姿

私はカライングの町の酒場に言った。
そこでは情報が沢山ある。

プッド「俺はプッド。お前の名を教える」

そして私は答えた。

ライン「私の名前はラインハルトよ。宜しくね」

プッド「あのおじさんなら水魔法のアレを伝授してくれるかもよ」

そしてあのおじさんに話しかけた。

ヒブン「わしはヒブン。ここで魔法を教えている。1つだけ教えて
やるぞ」

そして私は

ライン「私は電気魔法が特にうまく2番目にうまいのが水らしいと
聞いています。」

そしてあの老人は答えた。

ヒブン「ふっはははは、お前は『ヒールブレス』と言う魔法を授け
る。がんばれよ」

私はヒールブレスを習得した。

この魔法は威力が低いが味方全員回復できる魔法らしい。
そしてあの凄そうな人間にも話しかけた。

ドラーシャ「俺はドラーシャ（人間タイプ）。凄い情報を覚えましてよ。あのラインハルト姫が戦ったオーガーの言葉からして」

そして私は愕然とした。

ライン「私が男になりきり本当の闘いの力を手に入れる方法を知っているんですか。」

ドラーシャさんは大きく答えた。

ドラーシャ「勿論知っているぞ。この2つをすれば後は男への道を開ける。そして真の勇者の道。貴方は普通の女の子だよ。いくら姫でも伝説の勇者の力が秘めなんですよ」

私はドラーシャさんに教えてもらおう事にした。

ドラーシャ「ただでおしえるわけにはいかない。本来は1500エルドぐらいハラってほしい所だがたった21エルドにまけてやろう」

私はしぶしぶ全財産（21エルド）を払った。

そしてこのお金で情報を聞き出した。

その情報は恐ろしい愕然とする酷い情報だったのは知らない私（俺）だったのだ………

* * *

ドラーシャ「ラインハルト君。お前のこの長髪は何だ。男なら男ら

しく髪を切りなさい。そして一人称は俺にしなさい。これがお前への試練だよ」

俺はこの情報を聞きそれをする事にしたがった。

ライン「まずは、俺の髪を切りまくる」

俺は長い髪をバツサリと切った。

勇者となる為にはそれをするしかない。ドラーシャさんから聞いたからだ。

前髪はパツンとなり、後ろをはさみで刈り上げ、耳も出た。

綺麗な髪も沢山切れたのでそれを闇市で売ったら400エルドになった。

400エルドは俺達にとってはかなりの大金だ。

それだけのものを得た代償は大きいが、俺は男に、勇者に1歩近づいたと思う。

ライン「ギルドさん。俺は任務がしたいぜ」

俺はギルドに行き依頼状を見た。

俺はこの蜂の巣に行く任務をする事にした。

その時俺の所に仲間になりたい人が来た。

ルファ「始めまして、私はガラ・ルファと申します。貴方は強そうですね。仲間になりましょう」

私、いや俺はこのルファを仲間にする事にした。

俺とルファは蜂の巣に行くのであった……

* * *

その頃バロリア達は……

バロリア「いけえー【鉄の剣ブーメラン】」

僕達はダークライズさんと練習をしている。2人だけで

ダーク「フン、この程度か…【火炎竜剣】」

ダークライズさんは火炎の龍を剣に集めて攻撃してきた。

へブ「仕方ない、【ヘヴン・ソード】」

へブさんは鼻糞をほじくっていたが強力な天国の剣を呼び出した。

それで火炎竜剣に打ち勝った。

ダーク「ぐっ【ダークソード】」

ダークライズさんはもっと強い剣を呼び出しヘヴンソードを切り裂いた。

僕は突撃した。

バロリア「新奥儀完成。完走だああー【真空剣】」

僕は剣に竜巻の力を集めて一時的に強力な鉄の剣にした。

これでダークライズさんへ攻撃した。

ダーク「ぎゃああああああ。これまでするとは【ヒールブレス】」
僕達全員の傷はいえた。

ダーク「魔法を使っても良い。俺を倒せるかな【闇の精霊・ダークライズ】」

ダークライズさんに強力な闇が集まった。

そして……

ダーク「わしを本気で倒せるかな。これがわしの本当の姿だよ」

ダークライズさんは闇の精霊に変身した。

それどころか昔の勇者が倒した闇の魔王じゃんと思った。

でも今は仲間だけと練習中なので相手だ。

僕たちはこのダークライズさんを倒すしかない

バロリア「かぜのたまよ本気で倒せ【エアロラ】」

僕は強烈な風の玉を作り出しダークライズさんへやった。

そして……

ダーク「フフフフ【ダークボム】」

強烈な闇の爆弾がエアロラと相打ちした。

第11話 俺の決意の後姿（後書き）

ラインハルトの決意の印の描写や言葉を前よりもしっかりとさせました。

作者に少し髪フェチな部分も見えましたね。

これからも頑張りますので応援宜しくお願いします。

第12話 蜂の巣と特訓

ラインハルト「いくぜえー」

俺はラインハルト。今は蜂の巣に行く。

ラインハルト「ラインハルトさん。何故か少しだけ以上に長い髪があるんですけど」

俺は髪を切り立て。

自分で切ったのでそれはわからない。

ルフアさんにそろえてもらおう事にした。

10分後

ルフア「ラインハルトさん。完成です。」

どれどれと俺は見ると

ラインハルト「ちゃんとなっている。どうも」

俺は男っぽく話すのも苦労している。

ルフア「こちらこそ有難うございます。」

そして俺とルフアは蜂の巣の奥に向かっている。

キラビー「ブーン、ブーン」

3体のキラビーが俺らを襲ってきた。

ラインハルト「一気に行くぜえー」

俺は2体のキラビーを切り裂き倒した。

ルファ「氷よ打て【アイス】」

氷がキラビーを切り裂き消滅させた。

合計3の経験値を得た。 3エルドゲット

現在エルド 403エルド

ラインハルト「この程度ではないな。俺らは物足りない。」

ウイスプ「シュー」

ウイスプ1体とキラビー2体が現れた。

ルファ「氷よ打て【アイス】」

ウイスプを消滅

ラインハルト「滅多切りだあー」

俺はキラビー2体を切り殺した。

10の経験値と4エルドをゲットして407エルドにお金が増えた。

ルファ「あ”あ”あ”

ルファの所に強敵が3体いた。

* * * * *

その頃バロリア達は

バロリア「も、もうだめ」

僕は倒れそう。いくらか戦ったかわからない。

あのエアロラも失敗しこの後も攻撃を受け続けた。
魔力は格段に上がっているが

へブ「魔王よ力をくれ【ファイナルヘヴン】」

へブは全身に力を込め強烈な力でダークライズへ攻撃した。

ダーク「ぐっ」

僕とへブは取りあわず、30分の休憩時間を設けた。

第13話 二つの戦い

トロールとブラックウィispと白蜂だったのだ。

ルファ「仕方ない。これを使うか【キャプチャーオン】」

ルファはブラックウィispを謎の駒で回してキャプチャーと言う事をした。

ラインハルト「白蜂ぐらいは雑魚【サンダー】」

俺は電撃で白蜂を貫いた。

これぐらいの敵は俺にとっては雑魚だ。

ルファ「ブラックウィisp。自爆だ」

黒ウィisp「ボポー【自爆】」

ブラックウィispはルファの指図を受け自爆した。

敵のトロールも倒した。

ブラックウィispを他の行動させずに自爆させたのでその分の経験値も入る。

一石二鳥だと俺は思った。

113の経験値を得た。 43エルド手に入れた。

ラインハルト「お金が450エルドになったぜえー。冒険の先へゴ

」

その頃蜂の巣洞窟にいるキラークイーンは

キラークイーン「フフフ。大魔王軍基地の蜂の巣に1人の女性と1人の男性が来ているようだな。」

そしてキラークイーンの手下達は

キラビー「がんばりますよ」

一野「キラークイーン様。あたしはあのブロント姫と言う輩を倒します。」

凛阿「一野と一緒に戦います。」

キラークイーン「モンスターはキャプチャーが出来ないようにする。

【キャプチャー不能】」

その不能になつたモンスターたちがルファと戦うのである。

キラークイーン「トロール3体とオーガーゾンビと回復スライムを用意する。お前らはあのルファと言う水色髪の少年を狙え」

そして俺達は冒険の先に行く。

ラインハルト「鎧が手に入る場所は無いと思うけど有ればね。」

ルファ「氷の本当の力を手に入れたいです。」

そして2つの道に分かれていた。

それは、鎧コースと氷コースがあった。

丁度良いと思いつながりかもしれないが俺とルファは別れた。

俺は鎧コースを進んでゆく

ラインハルト「うああああー」

一野「この先は通さない」

凜阿「また、愚かなことを繰り返すつもり？」

ちなみにルファの方は

ルファ「モンスターがら体も、やばい!？」

ラインハルト「よっしゃー行くぜえー」

俺はまずあの怖そうな女からやる事にした。

一野「うふっ【スパークバリア】」

あの怖そうな女は強烈な光の壁を作り出した。

俺はこの攻撃にはじきとばれそうなのでアレをする事にしたのだ。

ラインハルト「電撃よ。力を貸せ【ベルス・ダーク】」

俺の身体に強烈な電撃が帯びてゆく。

これで突進した……。

一野「バリアが壊れてゆく」

ラインハルト「これでおしまいだ【ベルス・ダーラ/放つ】」

俺はあの怖そうな女に強烈な電撃を放った。

しかし……

リア「残念だったわね。【天使の加護】」

可愛い方の女は聖なる光を放った。

これが俺のベルス・ダーラを消し去った。

怖そうな女が向かってくる!?

一野「力をいただくわ【スキルキャッチ】」

私、いや俺に変な感じの攻撃を受けたようだ。

ラインハルト「こうしてやる【アクア】」

俺は水で怖そうな女へ攻撃。

しかし……

一野「フフフフ、電撃よ。力を貸せ【ベルス・ダーラ】」

一野に電撃の帯が包まれた。

そしてアクアがあたった。

一野は電撃が水を通し多めにしびれた。

ラインハルト「自滅だったな！【エアビーム】」

俺の口から強烈な風の光線が怖そうな女にむけられてはなった。

一野「グブツ【エレクトリックボール……】」

敵は技の最中で倒れた。

エアビームはとどめだがこれは必要なかったようだ……

リア「これで最後よ【神の怒り】」

凄い爆発がおき沢山の地割れが起こる。

遠くから悲鳴が聞こえる。これは多分ルファの声だ。

俺は早く敵を止めて倒さなきゃならない。

神よ力よ。地割れが収まるぐらいの力よ。下さい。

ラインハルト「世界を守る。宇宙を守る。これが私の使命。勇者ラインハルトの名の元へ強烈な電撃を作り出せ【サンダーネット】」

第14話 ルファVSモンスター軍団(前書き)

約450日更新せずに放置してしまいすみませんでした。
次回からはこのような事が無いように気をつけます。

第14話 ルファVSモンスター軍団

ルファ「この先に氷魔法の技習得方があるんだ。」

私はルファ。この先を通っている。

でも都合がよくブロントさんと私のほしい物の道があった。

これは絶対ワナだと思うけどワナとわかって通った。

すると！！

トロール3体とオーガーゾンビと回復スライムと一緒に襲ってきたのです。

ルファ「一気に5体ものモンスターが出現ですか……。厄介で卑劣ですね。【キャプチャーオン】」

敵5体全てキャプチャーしてみたのですが効かない属性を全部が持っていました。

珍しい事もある事ですが不利な状況です。

やっぱり敵軍ボスの強力な手下とかですかね。

ルファ「氷よ。敵を凍らせる【ブリザード】」

敵全員、特に回復スライムに攻撃したが……

敵のトロールが回復スライムを守り回復スライムが自分にベホイミを唱える始末。

勝利までの道は遠いだろう。

モンスターたちの攻撃を受けながらアイスシールドで守った。

ルファ「氷よ。敵を殺せるほどの力となれ【ブリザードブレード】」

私の手に氷の剣を出現させた。

トロール「ブフン！！」

トロール3体が同時攻撃してきた
私はその攻撃を避けた。

トロール族は賢さが低い。
トロール3体は仲間割れしたらしい。

ルファ「うりゃあああああ」

この隙は大きい。私の氷の剣が回復スライムを貫いた。
回復スライムは消滅した。

その時遠くで大爆発が起こった。
そして地割れが起きた。

ルファ「ぎゃあああああああああ、やばい。逃げよう」

私は戦闘離脱した。

8エルドを手に入れて。
私はラインハルトさんとはまだ別のエルド。1008エルドもある。

そして私は先を進むのであった。

第15話 キラークイーン軍との戦い

俺はルファと合流した。

やはりワナだった。

そして俺たちは奥へ向かう

ラインハルト「何が待っているかな。」

俺はドキドキがとまらなかった。

ルファ「普通ボスキャラなんじゃないの」

そして奥へ向かった。

そこにはキラービー達が居た。

キラービー軍「50体一斉突撃だあああああ」

ラインハルト「火炎の龍よ。全体へ攻撃しろ【ファイアー/全】」

ファイアーは全体攻撃として攻撃された。

威力は3分の2に軽減されているが敵全員に攻撃できる所は良い。

一気に全滅さて俺は50エルドをゲットした。

キラークイーン「お見事。最終バトルをします。オツホホホホ」

敵は毒キラービー1体とブラッドウィスプ2体とオーガーゾンビの

ようだ。

ルファ「まずはウィスプからだ【ブリザード】」

ブラッドウィスプを1体しとめた。

ブラッド「ボオーボオー【ダークメテオ】」

闇の隕石をルファに撃ってきた。

しかし優しいルファでも凄い運動神経しており避けた。

キラークイーン「オツホホホホ、やっておしまい。」

オーガーゾンビ「殺しを待っていたぜえー」

オーガーゾンビは俺に攻撃している。

ラインハルト「色男（女だけど）の俺様に叶わないよ。ばーか【サ
ンダーボール】」

電撃の圧縮した丸状のものを作り出し敵のオーガーゾンビをしとめ
た。

ルファ「ブリザードで決める【ブリザード】」

ブラッドウィスプをしとめる事は出来なかった。

俺達はルファの1008エルドも俺のお金となった。
ルファは俺の仲間である。

そしてカライングの町に帰ってきた。

現在エルド1508

第16話 カライングコロシム

ダーク「おやつ。カライングコロシムが始まるらしいよ。俺はディングと観戦することにしよう……ヘブ。お前はどつする」

そして俺はダークライズ様へ答えた。

ヘブ「俺は出場するぜ」

このコロシムは勝ち抜き戦である。

現在5連勝中のサリー「シルヴィア、そいつに勝てる者はいないよ
うだ……」

サリーに次挑むのは俺のようだ……

ヘブ「頼もう。」

サリー「……フン、わらわに勝てないでしょうねえ」

敵は女。しかし俺は容赦しない。

相手は強敵であるから。そして、俺は負けたくないから……
今までの修行の結果を生かしておきたいのだ。

ヘブ「天国よ。力を貸せ【ヘヴン・ソード】」

俺の手に強力な剣が現れた。

その剣でサリーへと攻撃を放った。

サリーはその攻撃を避けたが、少しかすった様子……

サリー「この勝負。一気に決める……!」【アブソリュート・ゴリン
グ】」

敵は凄いスピードで俺に近づき攻撃してきた。

へブ「ぐっ。鎧を用意してよかった……」【ヘヴン・ザ・ショット】」

俺は天国の力を集中して敵へ攻撃した。

サリー「フン……」【アブソリュート・スタッピング・トゥ・デス】」

敵は剣を伸ばして突き出してきた。

これだけの攻撃には俺の最強技で向かい撃つしかない!

へブ「しねええええええええ【ヘヴン・ファイナル】」

へヴンの力を凝縮し俺は折れと言ってしまっただけで衰弱した。

サリー「わらわの勝ちはおほおほおほおほおほおほおほおほ【ラ
スト・エン……】」

敵はおほおほいすぎで技の途中で俺の攻撃で倒したんだ。

俺はサリーに勝利した。

そして、俺は98人の挑戦者を倒し、99連勝した。

俺の前に一人の男が現れたのだ。

俺は負けない。100連勝してやる……!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6064c/>

ラインハルト姫とバロリア王子

2010年10月9日12時12分発行